

本講義資料のご利用にあたって

本講義資料内には、東京大学が第三者より許諾を得て利用している画像等や、各種ライセンスによって提供されている画像等が含まれています。個々の画像等の利用については、それぞれの権利者の定めるところに従ってください。

著作権が東京大学の教員等に帰属する著作物については、非営利かつ教育的な目的に限り複製および再配布することができます。

ご利用にあたっては、以下のクレジットを明記してください。

クレジット：

UTokyo Online Education 学術フロンティア講義 2025S 國分功一郎



2025年度S Semester 学術フロンティア講義
「30年後の世界へ——変わる教養、変える教養」

〈享受の快〉

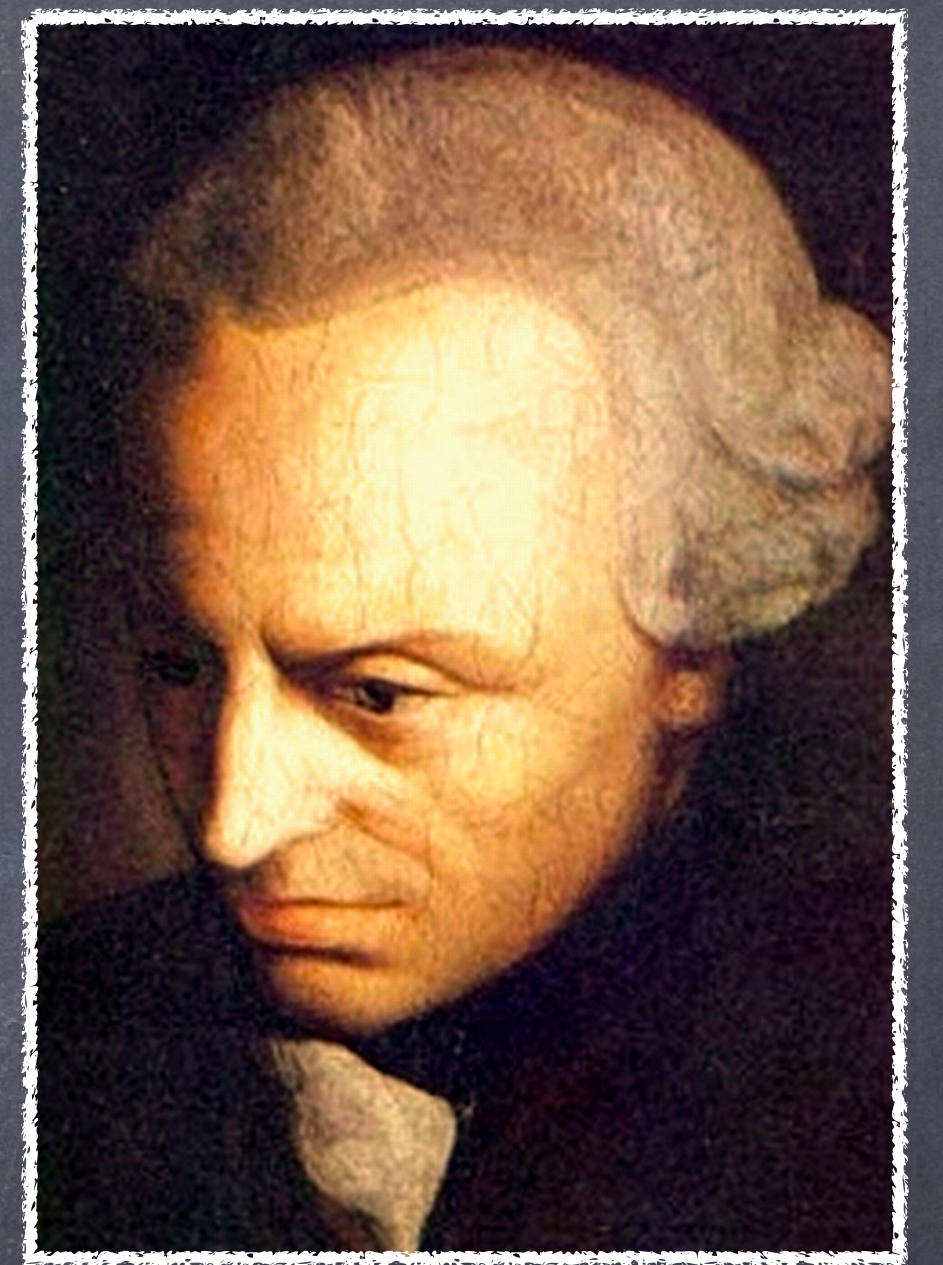
——カントと嗜好品——

2025/4/18

「楽しむ」や「享受する」を哲学的に考察する

- 嗜好品に注目する。
- 嗜好品は哲学的に考察されたことがほとんどない。
- 嗜好品は、「栄養のためでなく、味わうことを目的にとる飲食物。酒・茶・コーヒー・タバコなど」（『大辞林』）。
- 嗜好品は栄養摂取のような目的をもたない。その意味するところは？

- 「嗜好品」という語は日本語にしかないと言われるが、ドイツ語にはまさしくこれに相当するGenußmittelという語があり、そもそも「嗜好品」はこれの翻訳語であったことが分かった。
- Genießenは「楽しむ」「味わう」の意の動詞。Genußはその名詞形。Mittelは手段。
- ドイツ語で著述した哲学者カントが「嗜好品Genußmittel」や「嗜好」Genußについて論じていることも分かった。
- 「享受の快」がこうして研究の対象に。



イマヌエル・カント
(1724-1804)

Genuß (嗜好、享受) の概念という手がかり

- カントは何ごとにつけ、上位／下位とか、高次／低次などと平気で言う。
- 嗜好＝享受は低次。享受の快も低次。楽しいも低次。しかし馬鹿にしているわけではない。
- 『判断力批判』という本がこれを真面目に取り扱っている。
- 「快適なものはまた、人間を開化するのではなく、たんなる享受に属する」。
- 享受は「快適なものAngenehmen」という概念に結びつけられている。享受の快＝快適なもの。

なぜ『判断力批判か』

	『純粹理性批判』 認識能力	『実践理性批判』 欲求能力（倫理）	『判断力批判』 感情能力
能力の 高次の実現	アプリアリな総合判断	善（それ自体で善い）	美 崇高
能力の 低次の実現	アポステリオリな判断 分析判断	有益性（何かのために善い）	快適なもの （= 享受の快）

問題となる四つの枠

	『純粹理性批判』 認識能力	『実践理性批判』 欲求能力（倫理）	『判断力批判』 感情能力
能力の 高次の実現	アプリアリな総合判断	善（それ自体で善い）	美 崇高
能力の 低次の実現	アポステリアリな判断 分析判断	有益性（何かのために善い）	快適なもの （= 享受の快）

快の対象は四つしかない（カント）

- 「快の感情に関連して対象は、快適なものか、美しいものか、崇高なものか、（端的に）善いものか、これらのいずれかに数え入れられなければならない」。

快の四つの対象

- ・ 快適なもの
- ・ 美しいもの
- ・ 崇高なもの
- ・ （端的に）善いもの

四つの快の対象の配置

	『純粹理性批判』 認識能力	『実践理性批判』 欲求能力（倫理）	『判断力批判』 感情能力
能力の 高次の実現	アプリアリな総合判断	善（それ自体で善い）	美 崇高
能力の 低次の実現	アポステリアリな判断 分析判断	有益性（何かのために善い）	快適なもの （= 享受の快）

右上から反時計回りに番号を振る (象限番号)

	『純粹理性批判』 認識能力	『実践理性批判』 欲求能力 (倫理)	『判断力批判』 感情能力
能力の 高次の実現	アプリアリな総合判断	善 (それ自体で善い) ②	美 崇高 ①
能力の 低次の実現	アポステリアリな判断 分析判断	有益性 (何かのために善い) ③	快適なもの (= 享受の快) ④

研究の出発点となった表

	『実践理性批判』 欲求能力（倫理）	『判断力批判』 感情能力
能力の 高次の実現	善（それ自体で善い） ②	美 崇高 ①
能力の 低次の実現	有益性（何かのために善い） ③	快適なもの （=享受の快） ④

各象限の説明

	『実践理性批判』 欲求能力（倫理）	『判断力批判』 感情能力
能力の 高次の実現	<p><u>善いもの</u> それ自体で善い、端的に善い 道徳的存在者としての人間の目的 【直接に満足を与える】 ②</p>	<p><u>美しいもの</u>：目的なき合目的性 <u>崇高なもの</u>：人間性という目的 【直接に満足を与える】 ①</p>
能力の 低次の実現	<p>有益性（何かのために善い） 設定された目的（生存や安楽な暮らし） にとって手段として有用なもの 目的-手段連関 ③</p>	<p><u>快適なもの</u> （=享受の快） 【直接に満足を与える】 ④</p>

「目的」（「べき」）と「手段」の観点から見ると…

	『実践理性批判』 欲求能力（倫理）	『判断力批判』 感情能力
能力の 高次の実現	<p>目的をもつが手段をもたない <u>善いもの</u> それ自体で善い、端的に善い 道徳的存在者としての人間の目的 【直接に満足を与える】 ②</p>	<p>目的（合目的性）をもつが手段をもたない <u>美しいもの</u>：目的なき合目的性 <u>崇高なもの</u>：人間性という目的 【直接に満足を与える】 ①</p>
能力の 低次の実現	<p>唯一、目的だけでなく手段を持つ 有益性（何かのために善い） 設定された目的（生存や安楽な暮らし） にとって手段として有用なもの 目的-手段連関 ③</p>	<p>唯一、目的も手段ももたない <u>快適なもの</u> (=享受の快) 【直接に満足を与える】 ④</p>

嗜好品と違法薬物の明確な区別、そして依存症の問題

- 第三象限と第四象限は強く結びついている。たとえば、リラックスすることを目的に、たばこを手段として求めている時、その行為は第三象限に位置づけられる。
- しかし第三象限と第四象限は区別されねばならない。たばこの味を享受する行為そのものは目的とも手段とも関係がないからである。「今日も元気だ。たばこがうまい！」だけ。
- 第四象限が目的とも手段とも関係がない、特に手段性をもたないことは極めて重要。手段性の問題が、最近の私の最も重要な気づきであった。
- これによって、ドラッグ（いわゆる違法薬物）が嗜好品から明確に区別される。
- 薬物とは目的をもった手段以外の何ものでもない。治療や症状緩和等の目的に奉仕するもの。薬物は目的-手段連関そのものであり、第三象限に位置づけられる。薬物を味わうということはありません。
- したがって薬物は、目的-手段連関から自由な第四象限に位置づけられる嗜好品からは明確に区別される。
- また、第四象限に位置づけられるべき嗜好品も、それが享受の対象でなくなるならば、たとえば、苦痛を緩和するためにアルコールを摂取するという状態に陥るならば、もはやそこには享受の快は存在しない。

結論

私たちの日常は概ね第三象限に位置づけられる。カントによれば、それは望ましくない状態である。第三象限は設定された目的に駆り立てられ、何もかもを手段と見なす状態であるからだ。それは「病的」とすら形容されている。カントは人間が第三象限を脱し、第二象限に達することを求めた。しかし、もう一つ、その脇に、第二象限からの脱出路があったのではないか。それが第四象限の享受の快である。快適なものを享受している時、人は手段からも目的からも自由である。何にも駆り立てられていない。これこそすべてが第三象限に還元されつつある現代社会において何よりも必要なものではなかろうか。

	『実践理性批判』 欲求能力（倫理）	『判断力批判』 感情能力
能力の 高次の実現	<p>目的をもつが手段をもたない <u>善いもの</u> それ自体で善い、端的に善い 道徳的存在者としての人間の目的 【直接に満足を与える】 ②</p>	<p>目的（合目的性）をもつが手段をもたない <u>美しいもの</u>：目的なき合目的性 <u>崇高なもの</u>：人間性という目的 【直接に満足を与える】 ①</p>
能力の 低次の実現	<p>唯一、目的だけでなく手段を持つ 有益性（何かのために善い） 設定された目的（生存や安楽な暮らし） にとって手段として有用なもの 目的-手段連関（病的pathologisch） ③</p>	<p>唯一、目的も手段ももたない <u>快適なもの</u> （=享受の快） 【直接に満足を与える】 ④</p>